

# 英語教師に必要な資質・能力の考察

## The Talents Which Japanese English Teachers Should Develop

林 伸 昭

文科省は平成15年に『『英語が使える日本人』育成のための行動計画』を発表し、全国の中・高英語教師の研修のために「ガイドブック」を編纂した。その中で英語教師の英語指導力として以下の3項目を提示した：1)「教職」として求められる資質能力—教師としての情熱使命感、生徒の学びに対する理解、学習意欲を喚起する力、対人コミュニケーションなどの「教員として生きる力」；2) 英語運用力—単なる英語力ではなく、英語4技能における運用力を、授業の場面で柔軟に活用できる「英語教育的英語力」；3) 英語授業力—生徒のコミュニケーション能力を高める効果的な指導を計画、実施し、その評価（結果がうまくいったかについての見きわめ）に基づきよりよい授業へと結びつける知識や技術。岡田(2015)は、この3点に関して、英語教師は教師としての資質・能力を持ち、英語を使うことができ、英語がうまく教えられる能力が必要であることを上記の3点は指摘していると述べている。この3領域すべてに完璧な自信を持って教師生活を送ることができる人はそう多くはいないであろうが、それぞれが補完的に働き、よりよい授業に貢献することは想像できる。

本論文では、今一度、日本人英語教師（以下、英語教師）に求められる資質・能力を考察することを目的とする。

**キーワード：**日本人英語教師資質・能力、評価、ICT、語彙、文法、4技能、教職、英語力、英語運用力

### 目 次

- I. はじめに
- II. 英語教師に必要な資質・能力
  - 1.1 文科省の定義
  - 1.2 教職として求められる資質・能力
  - 1.3 英語教育的英語力
  - 1.4 英語授業力
- III. まとめ

## I はじめに

文部科学省（以下、文科省）は、平成25年度に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を、平成26年度に「今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～」を提唱し英語教育のさらなる充実を図り、さらに平成27年度に、「次期学習指導要領の改訂に向け、教育委員会を中心とした現職の小・中・高等学校の教員の英語力・指導力の向上のための研修等の実施状況の調査及びプログラム開発」を実施するために、「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」を行い、英語教員に必要な資質能力を明確化しようとしている。

このように英語教師を取り巻く環境はめまぐるしく変化しているが、本論文では、今一度、日本人英語教師（以下、英語教師）に求められる資質・能力を考察することを目的とする。

## II. 英語教師に必要な資質・能力

### 1.1 文科省の定義

文科省は2003年に「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」を公表し、全国中・高英語教師の研修のために「ガイドブック」を編纂した。その中には英語教師の英語指導力として以下の3項目が提示されている：1) 「教職」として求められる資質能力—教師としての情熱使命感、生徒の学びに対する理解、学習意欲を喚起する力、対人コミュニケーションなどの「教員として生きる力」；2) 英語運用力—単なる英語力ではなく、英語4技能における運用力を、授業の場面で柔軟に活用できる「英語教育的英語力」；3) 英語授業力—生徒のコミュニケーション能力を高める効果的な指導を計画、実施し、その評価（結果がうまくいったかについての見きわめ）に基づきよりよい授業へと結びつける知識や技術。

岡田(2015)は、この3点に関して、英語教師はまず教師としての資質・能力を持ち、英語を使うことができ、英語がうまく教えられる能力が必要であることを上記の3点は指摘していると述べている。この3領域すべてに完璧な自信を持って教師生活を送ることができる人はそう多くはいないであろうが、それぞれが補完的に働き、よりよい授業に貢献することは想像できる。また、このハンドブックは英語教員が備えておく基本的英語運用力の目標値として、英検準1級、TOEFL・550点(PBT)、TOEIC730点を挙げていると述べている<sup>1)</sup>。

以下、文科省(2003a)の定義と岡田(2015)の分類に従って、英語教師に必要な資質・能力を考察し

ていく。

## 1.2 教職として求められる資質・能力

高梨・高橋(2007)は英語教師を目指す実習生に求められる資質・能力として以下の5点を挙げている：1) 教員志望であること(教師志望)；2) 教職に対する熱意と意欲があること(教職熱意)；3) 生徒を理解しようとする姿勢があること(生徒理解)；4) 社会的な常識、礼儀、作法を心得ていること(社会常識)；5) 臨機応変に事態に対応できる能力があること(柔軟性)；6) 担任業務や授業分掌の助手を務めることができること(業務分掌)。この中で2)～6)に関しては、現職の英語教師も「教職という観点」から当然、備えていなくていけない能力と考える。2の「教職熱意」は、教師として当然有していなくてはいけない資質である。教育に対する熱意があり、情熱を持って、教科指導・生徒指導・進路指導等を行わない英語教師はいくら高い英語運用力を有していても教師として失格である。3の「生徒理解」も大切な資質・能力である。現在の中・高でははじめの問題が相変わらず後を絶たず起きている。また、不登校の生徒も増加する傾向にある。さらに、家庭環境に起因して問題行動(喫煙、万引き、暴力等)を繰り返す生徒もいる。英語教師は1人の人間として、このような問題に対応するために、生徒の気持を十分に理解できるカウンセリング・マインドを有する必要がある。さらに、問題行動を起こしながらも成長していく生徒の姿を見守る優しい心を有する必要があるし、時には、厳しく問題行動を叱責すると同時に、生徒がなぜそのような行動を起こすのかを理解する努力をする必要もある。また、進路指導で迷っている生徒に対しては、その生徒の性格や才能を理解した上で適切なアドバイスをする必要もあるであろう。さらに、勉強がうまく進まずに悩んでいる生徒、友人関係で悩んでいる生徒、部活動の先輩・後輩の人間関係で悩んでいる生徒の気持も理解し、適切な対応や助言を行う必要もある。英語教師には、教師としてこのように、「深い生徒理解」ができる資質・能力が必要となるのである。4の「社会常識」も英語教師は「社会人」・「組織人」として当然有していなくてはいけない資質である。よく「学校の常識は世間の非常識」と言われるが、外部の社会人との接触が少なく、また組織における上下関係も企業ほど厳しくない教師は、「社会人・組織人としての常識」に欠けると揶揄されることが多い。しかし、これからの時代、チーム学校として、英語教師は、学校内の同僚はもとより、保護者や地域社会の人々との協力を得ながら、生徒を育てていかなくてはならない。また、生徒が接する時間の最も多い社会人は教師であろう。教師は生徒にとっても「優れた社会人」としてのロール・モデルとなる必要がある。そのためにも、英語教師は「英語に関する知識」ばかりでなく、「社会常識」を上司・先輩・保護者・地域社会の人々からの指導、社会常識に関する書籍等を通じて身につけていく必要がある。5の柔軟性であるが、生徒指導と保護者への対応で特に求められる資質となると考える。授業を行っている時、生徒が何らかの理由で反抗的な態度をとるかも知れない。だからと言ってその生徒にだけかまっていたのでは他の真面目に学習をしている多数の生徒に不利益をこうむらせることになる。授業妨害を行う生徒には授業中は軽くなしながら、授業後に個別の指導を行うという柔軟さが英語教師には求め

られる。また、学級経営上も例えば、修学旅行のグループ作りで、1人だけグループから外れてしまうような生徒がいたら、事前に、「レポート」ができていない生徒に、その生徒をグループに入れてくれるように根回しもおこなうてはいけないであろう。また、保護者から無理な要求を突きつけられた場合でも、管理職と相談しながら、「保護者の要求と学校の立場」の「妥協点」を求めていく柔軟性を英語教師は有する必要がある。6の「業務分掌」についても英語教師は組織内の1人の教師として、英語を指導する以外の分掌業務をこなしていかななくてはいけない。英語教師はただ英語やその指導法を勉強して、生徒に英語を教えていけばいいわけではない。学校の中で、教科以外の多様な仕事を与えられる。担任業務では、生徒指導・生徒相談・進路指導・集金・配布物の回収等の仕事をこなさなくてはいけない。もちろん、生徒が問題行動を起こしたり、怪我をしたりしたらすぐに保護者に連絡しなくてはならない。また、校務分掌の仕事もある。教務部・進路指導部・総務部・図書視聴覚部・生徒指導部・生徒相談部等の仕事を1つか2つ担当し、学校を組織的に動かすために与えられた仕事をしなくてはいけない。教育実習生が来たら、彼らの指導もしなくてはいけない。また、校外での通学指導、地域行事への参加等もしなくてはいけないであろう。まさに、英語教師は「英語屋」であると同時に、学校内・学校外では「何でも屋」にならなくてはいけないのである。

### 1.3 英語教育的英語力

注の1で指摘しているように、文科省(2016)は英語教員に、英検準1級<sup>2</sup>、TOEFL iBT80点程度の英語力(言語知識)及び英語運用力(言語知識をコミュニケーションで使う力)を求めている。しかし、文科省の2016年度の文部科学省初等中等教育局国際教育課の調査では、中・高英語担当教員のうち、英検準1級以上又はTOEFL PBT 550点以上、TOEFL CBT 213点以上、TOEFL iBT 80点以上又はTOEIC 730点以上を取得している教員の割合は57.3%となっていることが判明している。従って、まだ40%の中・高の教員が「第二期教育振興基本計画の成果指標：グローバル人材関係：①英語教員に求められる英語力の目標(英検準1級、TOEFL iBT 80点、TOEIC 730点程度以上)」を達成していないことになる。

石田他(2013)は英語力を向上させるためには、英語教師は少なくとも以下の10項目の自己研修をしなくてはいけないと述べている；1) ALTと英語で話す；2) 英語の映画を見る；3) 英語の歌に親しむ；4) 英語で授業を行う；5) 英語番組を視聴する；6) 英字新聞を読む；7) 英英辞典を使う；8) 英語のウェブサイトを読む；9) 英語の小説類を読む；10) 海外放送を聞く、以上である。これらの10項目の研修を積み、英語力及び英語運用力は確かに向上するであろう。しかし、この10項目では、英語力、特に英語という言語の特質に関する知識が欠けてしまうのではないだろうか。生徒は英語史に関連する意外な質問をして来ることがあるし、微妙な単語のニュアンスの違いを質問してくることももある。また、教師は正確な発音ができなくてはいけないし、スピーチ・レベルの指導もできなくてはならない。さらには、英語のことわざ、英語のジョーク、英米人のボディ・ランゲージ、英語圏文化の基盤になっている聖書の知識等が必要になるであろう。また、教科書のトピックに出てく

る人種問題、環境問題、医学倫理の問題（例：安楽死の問題）、国際関係の問題、各国の政治問題等に関してもある程度の基礎知識を有している必要がある。このような知識はどのようにすれば得ることが出来るであろうか。それはまさに「地道な日々の教師の自己研修」以外にこれらの知識を得る方法はないであろう。従って石田他(2013)も指摘しているように、個人レベルで、『英語教育』等の雑誌・専門書（文法書、英語史、音声学、語法、英語圏文化を扱った新書等、英字新聞等）を読んだりして英語力及び、英語や英米文化に関する雑学的知識を増やしていく必要がある。また、スカイプで英会話の練習をしたり、Lang8でライティングの演習をしたりして、上記10項目以外の研修も行い英語運用力も高めていく必要がある。

また、JACET(2012)では、発音能力（生徒に発音の見本を示すことができる）を、次重(2002)は特に音声面での力（生徒は英語音に心を引かれる）をつまみ、音声面での英語力（音声学・音韻論）と英語運用力（正確で流暢な発音）を養成するすることの必要性を指摘している。

石田他(2013)は、このように英語力と英語運用力をしっかりと養成した上で、以下の英語教育的英語力も英語教師は自己研修により自分のものにしていく必要があると述べている：1) 教室内での授業の状況（あるいは、英語授業の段階、生徒の英語力・英語運用力）に応じて、適切な英語を使い分けることができる力；2) ALTと打ち合わせができる力；3) 英語が使える日本人のロール・モデルとして生徒に演示できる力；4) 各種の試験の問題（英語の入試問題、英語熟達度テスト等）に解答できる力を、英語教師は養成しなくてはならない。石田他(2013)は、これらの英語教育的英語力は一定の力量を獲得したあとも、日々の授業を英語で行う割合を高くすることにより、その力が後退することを食い止め、維持していくことは不可能ではないが、ただし、自らの英語教育的英語力を絶えず向上させていくことは、強い意志を持ち、永続的な努力を継続していかない限り至難の技と言えると考えると述べている。また、気をつけなくてはならないことは、英語教師を長く続けていけば、英語教育的英語力が身につけられるほどこの力の養成は単純なものではなく、「熟練・ベテラン」と言われる英語教師であっても、授業で求められる英語力・英語運用力（英語教育的英語力）を身につけているとは限らない。英語教育的英語力を伸ばすには、英語教師個々人の絶えることのない研鑽や教師が学校外で取り組める研修制度の充実等による英語教育的英語強化プログラムの開発と環境整備を進める必要があると指摘している。

このように、英語教師はその本業である英語において、英語力・英語運用力・人種問題・環境問題や英米文化に関する知識等の幅広い知識と技能を養成する必要がある。

#### 1.4 英語授業力

英語教師は、自己研修で養成した英語力や英語運用力を用いながら、生徒に対して優れた英語授業を提供しなくてはならない。

石田他(2013)は教師の資質・能力の中でも、教室内で大きく問われるのが英語授業力であると述べ、それは以下の3要素から構成されると指摘している：1) 授業実践で求められる力；2) 英語授業

に関する知識・運用；3) 国際理解教育に関する知識、である。「授業実践で求められる力」の具体的内容としては、分かりやすい授業、コミュニケーション活動や表現活動の指導技術、効果的な音読指導、生徒の興味・関心を引くことができるトピックの提供を挙げている。「英語授業に関する知識・運用」の具体的内容としては、英語の語学的知識、教授法（指導法）、指導理論の知識、学習指導要領の知識、テスト・評価の知識、日英語の相違点に関する知識等を挙げている。「国際理解教育に関する知識」の具体的内容としては、異文化コミュニケーションの知識、英語圏文化の背景的知識、国際語としての英語の役割に関する知識、国際関係・情勢に関する知識で構成されると石田他(2013)は記述している。

また、石田他(2011)では、教室で英語を教えるのに必要な具体的な英語授業力として以下の7点を挙げている：1) 適切な教材を与える力；2) タスクの知識；3) コミュニケーション活動における教師の役割；4) 読解指導力；5) 聴解指導力；6) スピーキング指導力；7) 英作文指導力、の7項目である。「適切な教材を与える力」に関しては、教育現場ではまず教科書の採択を行わなくては行けないが、生徒のレベルにふさわしいテキストを選定したり、与えたりすることのできる力は「英語授業力」の1つと考えられると石田他(2011)は指摘している。ただ、日本の教育現場で教科書は、中学校の場合は広域採択制であるし、高校は前の年度の夏に採択しなくては行けない。そうすると、実際の生徒に合わせた補助教材などを作成し、教科書の内容をよりよく理解させる必要が出てくるが、このようなことができる力も「適切な教材を与える力」に含まれる。また、「タスクの知識」に関しては、伝達能力を育成する授業は、何らかのタスクを解決するように仕組みめると石田他(2011)は述べている。つまり、実践的英語伝達能力を育成するには、英語教師にはタスクの知識が必要となるのである。「コミュニケーション活動における教師の役割」では、教師は以下の5つの指導力を有することが望ましいと石田他(2011)は記述している：1) ネゴシエーションの過程を授業に含めること；2) コミュニケーション活動が何らかの具体的なタスクの解決に結びつくように仕組むこと；3) 学習者に自立的にコミュニケーション活動を行わせること；4) コミュニケーション活動は、言葉そのものよりも、情報の授受に注意を向けた活動であり、この活動では言葉の正確さや適切さにはあまりこだわらないこと；5) 学習者を積極的にタスクの解決にコミットさせるような手立てを工夫できることの5項目である。「読解指導力」では、音読、フレーズ・リーディング、スキーマの活性化、速読、多読等の指導を行えることが必要となる。「聴解指導」に関しては、生徒の理解力を超えた英文はいくら生徒に聴かせても生徒は上の空で聞くことが多く、ほとんど効果を持たないため、慎重に生徒が必要とする音声の英文を見極めて、与えられる指導力を有する必要があるし、また、聴解テストの方法も理解しておく必要がある。「スピーキング活動」の基本となるのは音読であるが、生徒に音読させるのも楽ではない。生徒が音読で英語らしく発音できるようになる指導力を有し、生徒に音読させる自信をつけさせる力を持たなくては行けない。また、コミュニケーション活動を別とするとスピーキングの授業でよく行われるのはスピーチであろう。英語教師は、生徒がただ英文を読むだけのスピーチではなく聴衆に聞いてもらおう姿勢を持つスピーチをさせる力を持たなくては行けない。「英作文指

導」に関しては、例えば英語教師は毎回の授業の最後に、最低3文程度で前の日のことを生徒に自由に書かせてそれらを集め、普通に書けていれば3点、間違いが多いと1点だが、意味が分からないところには記号や赤線を引いて生徒に間違いを考えさせ再提出させたり、何も書いていないと0点で返却をする。これは生徒にできるだけ多くの英文を書かせることで、英作文力をつける指導であり、このような指導を通じて生徒は英作文力を伸ばしていくことができるのである。

このような力を英語教師が身につけるには、1.3で述べた『英語教育』の他に、明治図書の「目指せ英語授業の達人・シリーズ」、さらに、毎月2～4冊は発刊になる英語教育の専門書、あるいは、English Language Teaching(Oxford University Press)を読み、常に、自分の授業の改良を怠らないようにしなくてはならない。

また、授業改善という点では岡田他(2015)が「リフレクティブ・ティーチング」を提唱している。英語教師は、授業日誌や授業報告シート（チェックリスト形式の授業実践記録）を日常的に書いて、自分の授業の記録を残すことで授業中に気づかなかったことに気づき、生徒への理解を深めることができる。また生徒に対して各種調査やアンケートを採ることで、自分が授業で担当している生徒への理解を助けると同時に、生徒に対しては、教師が意欲的に授業に取り組んでいる姿勢を示すことにもなる。さらに、アクション・リサーチを行えば、授業における特定の問題（例：音読の時に、生徒の声が出ない）について、データの収集と分析をしながらシステムティックに自分の授業に関するリサーチを行い、その研究成果に基づいてよりよい授業を実践していくことができる。高橋（2011）もアクション・リサーチは、「リサーチ」といっても、伝統的な実証研究（scientific experimental research）とは異なりどのような状況にも普遍化して適用可能（context-free）な一般法則の確立をめざすのではなく、あくまでも、特定の環境（specific context）における個人や小集団が直面する問題を組織的なデータ収集とその分析を通じた「実践と省察」というサイクルを通して解決することで授業を改善し、英語教師のプロとしての成長を図ることが目的であると述べている。つまり、英語教師自身が主体的に自分自身の授業実践をふり返り、今まず改善すべき問題点、改善可能な問題点は何かを具体的に抽出し、生徒観察や予備調査、英語教師自身の学習や実践を通して得た知識を基にして、なぜ授業のある指導がうまくいかないのか、どのようにすれば問題を解決できるだろうかを自分の頭で考え、今までとは違った新たな指導仮説を立てて意識的な実践に取り組み、データ収集とその分析・考察等を通じて、その成果を検証するが、その結果は、あくまで特定の英語教師の授業環境に適用できるものであって、異なるcontextに普遍化して適用できるものではないと述べている。

しかし、授業日誌、授業報告シート、アクション・リサーチ、各種調査、アンケートを用いて常に自己の授業を振り返ることにより、より優れた英語授業力が英語教師に養成されていく。

### III. まとめ

望月他(2010)は、現在の教師は「教授者」（instructor）としてよりも、むしろ「促進者」

(facilitator)あるいは「媒介者」(mediator)としての役割が重視されてきていることを指摘している。これは、教壇の上の教師が知識を学習者に一方的に伝達するという概念からの変化を示している。つまり、教師が与える英語のインプットは別として、教室では学習者の方が教師よりも発話量が多いことが望ましく、そのためには、教師が授業の前に入念に準備をし、指示が明確で、学習者が実際に動きやすいようなタスクを豊富に授業に取り入れることである。その上で、教師は教室内をまわりながら必要に応じて側面から手助けをすることができるようになると望月他(2010)述べている。また、授業中の英語教師の役割としてはさらに、学習の良き「パートナー」(partner)であり、また学習を導く「指導者」(coach / trainer)であり、実際に目標言語である英語を用いて見せるという点では時に「演技者」(actor / per-former)ともなる。よい英語教師とは、上記の役割を時と場に応じて柔軟に使い分けることのできる教師といえる。そして具体的には、①生徒に常に共感的態度で接し、誰をも受け入れることのできる「懐の深さ」、②生徒の実態や要求に常に耳を傾ける「ニーズ分析(needs analysis)」や「反省的(reflective)態度」、③授業改善を怠らず、的確な指導・助言を目指す「プロとしての自覚」、さらには④言語を教える者として、積極的に人とコミュニケーションをとったり、英語があふれ出てくる「コミュニケーターとしての適性」を兼ね備えていることが求められる。しかし、この要件をすべて持ち合わせていなくても、これらを目指し努力している教師はすべてよい教師と言える。また、誰もがみな同じ紋切り型の「よい英語教師」となる必要はなく、ひとりひとり、人間としての魅力を生かすことができればよいのであると述べている。

この論文においては、「英語教師に必要な資質・能力」を考察してきたが、望月他(2010)が述べているように、これまで述べてきた要件をすべて持ち合わせていなくても、その要件を満たそうと、常に自己の英語力を向上させるように勉強を重ね、また、常に自分の英語運用力を高めようと研修を続け、さらに、授業改善のために英語教育関連の雑誌や専門書を読み、自分の英語授業を授業日誌で振り返ったり、アクション・リサーチで自己の授業の問題点の改善を目指し努力している教師こそが、つまり、常に「より優れた英語教師になろうと努力する姿勢」が、英語教師に必要な資質・能力であると考えられる。

## 注

- 1.文科省(2016)ではこの目標値が、英検準1級、TOEFL iBT 80点程度に変更されている。
- 2.英語4技能試験サイト (<http://4skills.jp/>) の換算では英検準1級はTOEIC(R, L) 785点になる。

## 参考文献

- 石田 雅近他 (2011) 『英語教育学体系・第7巻・英語教師の成長—求められる専門性』 東京：大修館書店
- 石田 雅近他 (2013) 『新しい時代の英語授業の実践：グローバル時代の人材育成を目指して』 東京：金星堂

英語教師に必要な資質・能力の考察（林伸昭）

- 岡田 圭子 (2015) 「評価とテスト」岡田圭子・江原 実明他（編著）『基礎から学ぶ英語科教育法』（pp. 269-293）東京：松柏社
- JACET教育問題研究所 (2012)『新しい時代の英語教育の基礎と実践：成長する英語教師を目指して』東京：三修社
- 高梨 康雄・高橋 正夫 (2007)『新・英語教育概論』東京：金星堂
- 高橋 一幸 (2011)『成長する英語教師』東京：大修館書店
- 次重 寛禧 (2002)『英語授業の創造』東京：鷹書房弓プレス
- 望月 昭彦他 (2010)『改訂版 新学習指導要領にもとづく英語科教育法』東京：大修館書店
- 文部科学省 (2003) 「『英語が使える日本人』育成のための行動計画」
- 文部科学省 (2003) 「『英語が使える日本人』育成のための行動計画のための英語教員研修ガイドブック」
- 文部科学省 (2013) 「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
- 文部科学省 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言～」
- 文部科学省 (2016) 「生徒の英語力向上推進プラン」

